



右肩下りの「テレビ産業」の映画志向

映画製作・配給会社のスターサウンズ代表の河村光庸さんは、海外映画の配給なども手掛けているが、やはり、「邦画製作」に能力を発揮している。河村さん製作の話題作の一つが『新聞記者』。同じく森達也監督の手による『i-新聞記者ドキュメント』は、東京新聞記者の「天敵」菅現首相の「本性」に迫る秀作ドキュメンタリーだ。

COVID-19で東京OlyParaで1兆円を稼ぐと目論んでいた天下の電通も、資金繰りのために「百年ビル」汐留本社ビルを売却し、旧鎌倉研修所、駒澤の土地などを売却してバランスシートの穴埋めをした。だから「右肩下り」はテレビ産業だけでなく、メディア世界に君臨していた電通でさえ深刻な社業のDX化が迫られている。電通のラテ事業部門に君臨した山本佳夫さん、元社員の佐々木宏さんなども、集中砲火を浴びて「撃沈」した。

そんな世相の中で不気味な存在感を示しているのが菅現総理だ。そんな「天敵」の存在を河村さんが放っておくわけがない。監督にテレビマンユニオンの内山雄人さんを起用して、菅現総理の「本性」に迫る「政治バラエティ風ドキュメンタリー映画」の『パンケーキを毒見する』を仕上げた。

現役首相をターゲットにした政治バラエティ風ドキュメンタリー映画『パンケーキを毒見する』

「文春砲」「赤旗砲」とは違う切り口

まず「天敵風証言」が並ぶ。石破茂、江田憲司、村上誠一郎、古賀茂明、前川喜平などの政治家・官僚の皆さん、そして森功、鮫島浩さんのジャーナリストの「パンケーキ評」が随所にちりばめられている。

菅首相は官房長官時代から永田町のザ・キャピトルホテル東急を「本陣」として、早朝から「食事談義」に誘い、「敵性度緩和」などの人間的な手を使う。また、マスコミ人との融和策としてパンケーキパーティを開く。ひと昔前なら、福田派は赤坂プリンスホテルを拠点に政略を巡らせた。あるいは有名料亭などがその場に選ばれてきた。

インタビューに応じた人たちは、それなりに菅首相の「権力の源泉」に触れ、怖さを強調する。そしてパンケーキの中身は「スカスカ」と嘆く。必ず相手を斃す「文春砲」「赤旗砲」ほどの「殺傷力」はない。アニメやイラストで「急所」をつこうとするクリエイティブ力が足りない。

安倍さんが君臨していた時期に、菅首相は数十億円の官房機密費を自由に使い、一日に換算すると300万円以上のお金を駆使して、権力基盤を築いてきたと、赤旗記者が調査資料を明かす。

習近平+王岐山同様の首相官邸のシフト

中国の抑圧的政権運営の根源は王岐山というこわいおじさんが中国要人の弱点を握っているからだ。前川喜平さんが、「内閣

のゲシュタポ」杉田和博官房副長官らが読売新聞にスキャンダルネタを伝え、嵌められた事実を語る。また、江田憲司さんは「菅さんは値下げおじさん」だとポピュリストの本質をつく。NHK料金、携帯料金など値下げ功績で手柄をあげてきたことをあげる。また、杉田さんら警察官僚でトップになれなかった人を要職につけ「出世競争」を煽るやり方はヒトラーのやり方そのものだ、と指摘する。ナレーションを担当した古舘寛治さんは、「投票率80%こそが日本人の革命だ!」と普段から主張し、「投票倍増委員会」を主宰している。映画の中でも、同じような趣旨が語られていた。現役の首相をターゲットにしたドキュメンタリーは日本初だそうだ。(天野昭)



意欲的に作品を制作し続ける河村光庸さんのプロフィール

1949年8月12日福井県生まれ。70年に慶應義塾大学経済学部中退。出版事業や映画出資の経験を経て、08年に映画配給会社スターサウンズを設立、代表取締役役に就任。海外作品の配給を行いながら、邦画作品の製作・配給にも力を注ぎ、『かぞくのくに』(11)、『あゝ、荒野』(16)、愛しのアイリーン』(18)、『新聞記者』(19)などの話題作を発表した。『宮本から君へ』(19)は、2019年の日刊スポーツ映画大賞で主演男優賞、監督賞を、ヨコハマ映画祭では主演男優賞を獲得している。

■スターサウンズ制作の主な作品(順不同)
『ヤクザと家族 The Family』『泣く子はいねえが』
『Mother マザー』『新聞記者』
『i-新聞記者ドキュメント』『宮本から君へ』『空白』
(2021年9月公開予定)